

# 南日本新聞夕刊 『愚つこと』 十回連載

平成九年四月～五月



## 花吹雪

父の一周忌、母の七回忌と重なって、三月末信州諏訪に帰郷した。法要後、電話で従妹の容体が悪いとの知らせがあった。予定を変更して、とりあえず見舞いに行く。熱海の国立病院とのことで、翌朝スーパーあずさ、横浜線、東海道線と乗り継ぎ、熱海駅に十一時頃着いた。

面会時間は午後二時よりとなっていたが、案外あつさりと病室を教えてもらえた。六人部屋の左手の入口で二人の看護婦が彼女の座るのを手伝っていた。

「あら、どうしたの。元気なつや子さんでしょ」と言つとバツの悪そうな顔で

「糖尿病を甘く見ていて」

と言つ。

体にだんだん力がなくなりナースコールのボタンを押す力も入らないという。昼食に出されたうどんをホークを手首で押さえながら平らげた。

案じるほでもないのではとそつと医師の控室に行った。

「長いこと糖尿病をほつたらかしていて、血管がポロポロです。いつ脑梗塞や心筋梗塞を起こしても不思議はありません。転倒での打ち身なども治せないのです」

時間の問題と若い医師は言つ。

新婚ホヤホヤの仕立屋の夫と福井から上京して来たのは三十年前であつた。頼られた夫は自分の背広を注文したほか、会社の友人を紹介してやつた。既製服でほとんど整つ時代となり、仕立屋をやめ水道工事の会社を作りバブルの波に乗って成功した。しかしその間の忙しさ苦勞は並大抵ではなかつた筈だ。隣は他人の東京砂漠。糖尿のこわさを知らなかつた彼女を無知と笑つのは酷であ

る。

病院を出ると眼下に海がせまり、老松を囲んで立ち並んだ満開の桜が、かすかな風にはらはらと散り、私に降りそそいだ。

一度と会ふことなき嗚咽をこらへ出づる

病院の道に降る花吹雪



## ふなと

中央高速諏訪インターを下りて諏訪市街への道の変貌ぶりはすさまじい。私が子供のころは一面田んぼだったのに、大型店が立ち並び、その奥は住宅街となつて一枚の田も見えない。

実家のある旧甲州街道にも店舗の数が増え昔の面影は皆無に等しい。行き交う牛馬の糞を掃き、ほつき目を付け道の両側を流れる小川から柄の長いひしゃくで打ち水するのが朝の私の役目だった。その小川も道路の舗装とともに暗渠（あんきよ）となり歩道になつて久しい。

諏訪湖の水も汚なくよんでいる。流れ入るいく筋もの川には、みの笠着けた漁師が川魚をとる細い舟を浮かべていたものだったが今はブロックで固められ、葦一本生えていないし、舟の影もない。自然の浄化槽である水辺の草が無くなつた結果が、現在の諏訪湖である。

第一の故郷たる入来もこの所変貌しつつある。

国道328線のバイパスが川沿いを通ることとなつて、何軒かの家が移転を余儀なくされた。五十年庭先からの眺望を楽しまれて来たM氏も、やむなく移転を決意された。帖佐に新築なさるといつ。「人間至る所に青山ありと思ひまして」

とのご挨拶に胸を衝かれた。この入来は彼の目に五十年間変しらぬ景色を保ち続け、直線にして二十キロほどの距離の移転をも青山の句を思つほどの痛みを与えているのだ。ある意味で入来の素晴らしさの証とも言えるのではなからうか。

入来の住人ばかりでなく「山青く、水清き」日本人のふるさととしての入来の自然を保つ工夫と知恵が必要だと思つ。一度壊した自然をもとに戻すには、何十倍もの経費と長い歳月が必要なのだから。

変り果てしふるさとなれどふるさとは

ふるさとなりけり一人佇む

## うたごころ

夫の故郷鹿見島に戻つてよかつたと思つことこの第一は、短歌の会にお誘ひ頂いたことである。

にしき江の同人として鶴田先生の懇切なご指導を受け始めて二年が経過したばかりなのに、私はおく面もなくこのコラムに歌を載せている。

二十五年間私は大手の会社の事務管理室でコンピュータのソフトを作り続けてきた。

この仕事は、根気と集中力が必要として、時間意識の外である。一三時間はあつと言つ間に過ぎて、その延長上で年月も瞬く間に過ぎた。賞を頂いたいくつかの私のソフトもハードの開発の速度には色あせたものになつてしまつた。結局私の情操に残つたものは皆無といえる。

田舎での時間の束縛のない生活の中で、庭の雑草の可憐な花や実生の木々の若芽を愛でる心のゆとりが生まれた。

表したいことを三十一文字に形を整え、あれこ

れ反芻して考えることは、心にゆとりあればこそ  
のもの。都会の厳しい勤務生活では全く不可能だ  
った。

それに何といつても豊かな鹿児島島の自然もつた  
ところを誘わずにはいられない。四季それぞれの  
美を見せる山々。泰西名画にでもありそうな川と  
森。鹿児島ならではの桜島、開聞岳、荒海に面し  
た海岸の砂浜や岩浜の美、神々の伝説の発祥地と  
しての数々の古めかしい遺跡。

七十、八十のお元気な同人の方々の中で、六十  
才台の私が娘気分になれるのも幸せなことだ。

「文は人なり」というが、よりしみじみと「歌  
は人なり」だと思つ。天性と人間の器量による。  
天性があらがうべくもない以上は、自己の啓発に  
務め、より大きな人間たることを目指そう。もし  
て小細工でなくふかぶかとした歌を作りたいもの  
だ。

うたごころ揺り起こさばやのびやかな

開聞すがしき戸柱の浜

## ビンゴ

今年が私がお当番で班の婦人部長だという年三  
回公民館の掃除と年二回の行事「お花見」「敬老  
会」に協力すればよいらしい。四月始め「お花  
見」の打合せがあつて役員十数名集まつた。

当日は新旧役員の挨拶、会計報告のあとは各自  
持ち寄りのお弁当を拵げての一杯、それからアト  
ラクシヨンとなるのだが、今年は何をやるのか。  
去年は抽選で景品を配つた。私が

「景品を出すのならビンゴにしたらどうですか」  
と提案すると体育係の若者がすぐに賛成した。  
役員の大半はビンゴを知らないが、面白そうだと  
それに決まつた。ビンゴの準備は体育係、景品は  
若いママさん達が買うことになつた。

四月十三日。例年になく早く咲いた桜はもう葉  
桜に近い。月初めから同居となつた娘と朝からせ  
つせと詰めた重箱を下げ、親子三人で公民館に行  
く。

総会は何故か女性が後ろに固まって座り、座敷は旦那衆がバラバラと座っている。お重箱さえも夫婦別々に用意して別れて食べるのには驚いた。席を同じうせずの名残なのだろうか。

いよいよ子供も参加のビンゴの時間。カードが配られ、役場勤務の体育係が説明する。カードには1から70までの適宜な数字が5行5列に並んでいて、抽出された数字と同じものがあればそこを押して穴を開ける。穴が縦横斜めいづれか一列開けばビンゴで賞品にありつける。

数字の刻まれたボールの入った容器をくるくる回して、出てくる数字を読み上げる係は娘である。皆すぐにルールを飲み込んで、読み上げられる数字をさがしてカードとにらめっこ。お年寄りも子供も夢中になって二回もやった。ちなみに私の戦果はポリバケツと台所洗剤だった。

孫を膝にビンゴカードを見つめぬる

媪（おつな）の背（せな）に光る春風

## 筍づくし

わが家の裏庭に二百坪ほどの孟宗林がある春には筍と戦争しているような気がするほど次々と顔を出して、あつと言つ間に黒々とした皮を着けた柱が林立してしまふ。「雨後の筍」を実感する日々が三週間ほど続いてその間は気せわしい。

しかし掘りたての筍を糠と鷹の爪を入れて茹で上げると香ばしい匂いがプンとして、まさに春の恵みだと思つ。先の柔らかい部分はわかめ、油揚げとともに朝のみそ汁に入れるのだがこれがまた実に美味しい。寒い信州では味わうことの出来ないものだ。もっとも味噌は信州味噌と麦味噌を五分五分溶いているのがミソなのだ。

「かくや姫の里」として竹を町のシンボルとしている宮之城の料亭が筍づくしの料理の招待会を開くとのこと、宮之城商工会の夫の友人から私も一緒に誘われた。結婚式場の大広間に百人以上も集まつただろうか。

御馳走を前にして、ちくりん指導官浜田氏によるスライドでの宮之城の竹の講義もあった。シェフは料亭の婿さんで、お料理を頂きながら説明を聞いた。刺身、酢の物、煮物、焼き物、揚げ物、鍋、ご飯、デザート全て筍づくし。よく研究された手の込んだもので、郷土を愛する料亭の皆さんの熱意が感じられる気持ちのよい会だった。

スライドの優良竹林は竹落葉に覆われた地面に、適当な間隔を保ち垂直に生えているがわが家の竹林は疎密自茶苦茶。下草の雑草を踏みしめるには長靴が必要と言えば想像いただけだろうか。しかしその雑草の花がまた楽しい。先日までは姫踊子草が一面に咲いていたが、これからは檜扇水仙がオレンジ色の小波をもえぎ色の葉とともにそよがせてくれる。

心籠もる筍づくしにさんざめく

川面の火影も人々の輪も

## ルビ

昨年末に妹からダンボール二箱の古書が届いていた。五十年以上も前の私の愛読書を実家を壊す際に保管していきたくて、壊す際に保管していきたくて、鹿児島も落ち着いた頃だろうと鹿児島も落ち着いた頃だろうと送ってくれたのだった。

先日納戸の本棚に収納するために箱を開けた。ほこりをはたき手にすると懐かしい本ばかりである。新潮社の世界文学全集は四冊だったが、先般本紙に掲載されていた山本実彦の改造社のオレンジ色の現代日本文学全集は二十五冊残っていた。カバーの箱の一番ボロボロは幸田露伴。「術くらべ」なんて奇てれつな作品の載った露伴集は他にはないだろう。私はこれで分厘毛の下の単位が絲(し)忽(こつ)であるを知って、小学校の授業で面目をほどこしたことを思い出す。

小学生が露伴を読むなんてと思われるかもしれないが、改めて開いて見ると、漢字の全て一字も

残さずルビが付けられている。これがあってこそ子供にも文学作品が読めたのだ。父が「この子は学校に上がる前に新聞を読んでいた」と言っていたが、タネを明かせば当時の新聞は同様に全てルビが付いていたのだ。そのおかげで知らず知らずの間に漢字を覚え熟語を覚えることが出来ただ。

戦後、当用漢字が制定され、新聞紙面の漢字も限定されルビは不要となった。しかし漢字の字面からのニュアンスは仮名にしては表せるものではない。微妙な陰影を持つことは文化だと思つ。中国の現在の文字でどんな漢詩が生まれるのだろうか。ワープロでさえも複雑な漢字を内蔵している。せめて文芸欄の作品は存分に漢字を載せて、全部にルビを付け、子供にも読めるようにすれば言葉の文化の先細りを防げると思つのだが。

うたかたの半世紀かな旧カナの

ルビふられたる懐かしき本

## 鎮魂の碑

先日、夫が「実に我が意を得た」と言つて差し出したのは、「新潮」五月号の曾野綾子の「夜明けの新聞の匂い」であった。それは彼女が第二次大戦のノルマンディ上陸作戦の米軍の戦死者のフランスにある墓地を訪れたときの感想である。

墓地は完璧な芝生の上に、洗い上げられた墓碑の整然とした列が並び、五時の閉門時にはアメリカ国家と鎮魂の曲が五十余年間毎日流され続けて来ているという。

国のために失われた命を大切に扱っているアメリカに比し、日本人が、不孝にも戦争の犠牲になつた日本の若者に対して、堂々と悼むことなく過ごして来たことを詰問している

私の父山崎良順は、僧侶であり梵文学研究者として将来を嘱望されていたが、山砲隊長として中国に出征して二度も銃弾を浴びた。的中させた砲弾の下には一般民衆もいた。戦後の半生を鎮魂と

平和祈願のために尽くして来たが昨年亡くなった。父は大阪万博に大きな平和観音像を祀り、それを本尊としてラオス館を信州の霧ヶ峰に移築し、昭和寺とした。四十余体もの平和観音の分身を激戦地の慰霊塔に寄贈し続けてきた。

夫の故郷人來では終戦五十周年記念事業として、父の平和観音像の入った鎮魂碑を建てることに町民が同意し、招魂社の境内に昨春立派な碑が完成した。

碑文の「鎮魂」の二字は父の友人で比叡山の大家僧正渡辺恵進師の筆になる。小さな町の町民の献金で建てた碑である。本当に気持ちばかりのお礼しか出来なかつたが、師はそれをそのまま父の昭和寺に寄贈された。

恵進師は今春天台二五五世のお座主となられた。世界宗教者会議の名譽議長でもあられる。碑は人來に燦然と建っている。

鎮魂の碑にぬかづけは緑なす

木々ゆらめきて語らぶごとし

## パソコン時代

日進月歩という語は、まさにコンピューターのためにある。三十年程前、私は電車の中の素敵な広告に、持ち前の好奇心が刺激されて、当時花ざかりだった電算機学校に一年通った。真空管、トランジスターを経て集積回路ICの時代である。自分の作成したプログラムの通りに動いてくれる機械の面白さに、つい二十五年ものめりこんでしまった。その間の進歩はご存じの通り。パソコンが出現した当時は玩具のようなものだったが、いまや処理がどうなっているのか理解しようもない。七年ほど前、大型コンピューターでの処理専門だったシステム部に、研究用にパソコンが入った。出来合いのソフトが種々あつて、それを使って、希望の統計やグラフをたちどころに画面に見せるシステムなど作ってみた。マウスを力チカチさせながら画面上で処理するのは、また結構面白い。何種類ものゲームソフトが入っていて、お

昼休みには皆競ってその前に座る。「上海」という積木崩しのようなゲームが人気で、全部開くとチャラランと音楽が鳴って赤い龍が現れる。

定年になって鹿児島に戻り、韓国にいる弟からパソコンのお古をもらった。囲碁と麻雀のソフトが入っていた。囲碁は私には説明不足なのでもっぱら麻雀専門だったが、電源を誤って落専門だったが、電源を誤って落して故障させてしまった。

今やインターネットの時代。例の好奇心の虫が動きだす。先日通販の広告で格安なセットを見かけて、へそくりをはたいて買ってしまった。

梱包をほどき、説明書と首っ引きで接続する。あまりの機能やソフトの多さにびっくり夫や娘に「宝の持ち腐れ」と言われそつである。乞つこ助言。

地震ありて停電おそれパソコンの

終了までの数秒おののく

数(すつ)か数(すつ)か

「数か数か」とは幸田露伴がその作「運命」で明の建文、永楽二帝の軌跡(きせき)を嘆じた言である。そんな数奇な運命とまではいかなくとも人にはそれぞれの軌跡がある。

夫は少年のころ、重症の肋膜炎、腹膜炎を患って九死に一生を得た。目前に控えた中学受験もかなわず、自分の力では如何ともしがたいことを知って、易学の本を手にしたと言つ。それ以来四柱推命、家相、手相、印相、墓相、なんでも良いといわ相、墓相、なんでも良いといわれることには素直に従つ。

入来の家を新築するときも大変だった。あちらは鬼門だから何があつては駄目。こちらは裏鬼門で何が駄目。欠けがあつては駄目で張りがなくてはいけない。廊下は三尺幅以上はいけないし、それぞれの部屋の位置も良い方角があるという。

私は方眼紙に分度器を当てては、全ての条件を満たす設計の線を引くのだが、パズルのよう

結構楽しかった。

国道328線のバイパス工事に、集落の墓地がかかり、新たに造成することに決まったならかな西斜面で、大方は西向きに立てられるだろう。そこでわが亭主の墓相論が登場する。亭主によれば、墓は朝の日をさんさんと浴びるよう東向きが正当で、お参りする私たちが西方浄土に向けて拜むべきだと言つのだ。それも一理あるとも思つのだが、みんな前を向いているのに、わが家のだけが回れ右しているのも変でしょうと言つてみても、聞き入れられるような人ではない。最善は後世への義務だと言つ。まあ入来院の殿様の墓の方を向くことにもなるか。夫の見る易によると、私のこれからは、よい運勢に入るのだそつだ。終わりをければ全て良しと行きたいものである。

胡瓜の花露の緑に覗きみて

ふとよき日ある予感のよきる

## 渋谷氏下向七五〇年

夫と初対面の時、告げられた名前が理解出来ず、紙に書いてもらった。そして「入来院重朝」という大層な名前に吹き出したものだ自分がその姓を名乗るようになって、他人にちゃんと読んでもらえたことは、まずない夫の名刺はルビ付きである。友達で長く「入金さん」だと思つていた人もいた。鹿児島ではさすがに読んでではもらえないが、電話で名乗る場合はすんなりとはいかない。「入来院」になつていたりする。

入来院氏は鎌倉時代に地頭として関東から下向して来た渋谷氏の一族である。五兄弟でそれぞれ地名東郷、祁答院、鶴田、入来院高城を名乗つた。元寇の折り、串木野から博多に元寇の折り、串木野から博多に向かつて出征するさまが「串木野さのさ」に歌われているという。南北朝を経て戦国時代になり、一族は次々に島津氏に滅ぼされて行く。阿久根から始良までを手中に収めたこと

もあつた入来院氏も「始良の岩剣城で、海から攻めて来た島津勢の三発の銃声にひつたまげて逃げだしたのが凋落の初めだった」とは郷土研究会の先輩の話である。結局お互いの婚姻によつて、入来院は島津の家臣として維新まで存続する。秀吉の島津攻めをしのいだ義久、関が原で勇名をはせた義弘兄弟の母は入来院重聡の娘雪窓であることを、知重聡の娘雪窓であることを、知る人は少ないだろう。

鎌倉時代から維新まで同じ領地を守つた家は、人吉の相良家と入来院家のみとも言われる。わが家は次男の格として筆頭家老の職を勤めて来たといつ。

渋谷氏が下向してきた宝治二年より数えて平成十年は七五〇年になるとのこと。末裔の方々や歴史愛好家とともに記念したいと思つている。戦国時代のドラマに思いを馳せながら。

縁かげ玉石垣は苔むして

祖霊まします里静かなり